兎園随筆

出会い（その三）

―照千一隅―

燕木寿江

ブルドーザーが狂ったように緑の丘陵を赤裸にくだき、ダンプカーがたんぼを埋めていた。その騒音にも馴れ、道路が舗装されたと言っては喜び、鉄道が通ったと言っては喜んでいるうちに、住宅や商店と一緒に幼稚園もやたらに増えてきた。「一つの台地に各園の十一台のバスが来る」と言われた。そしてその大方の幼稚園は堂々と文字指導をうたい、体育、音楽、英語、そのあとにはスイミング、と個々の講師を連ね、高校なみのプログラムを掲げて人集めに奔走した。小さな例では「か」という字が書けないで、ボール紙でつくった大きなかめの甲羅を背負わされて部屋中を歩き、廊下で立たされた、といったような冗談のような話がとび交った。急激な開発と人口増加により入園受付けには、想像を絶する一日徹夜という事態を起こし、翌年は二日徹夜（四十七年）と、エスカレートす

るばかりなので、次の年は抽選にした。早朝から、NHKの取材を受け放映された。「はたして、幼稚園はこれでよいのか」という疑問がつきまとった。緑の山が減った。たんぼが、畑がなくなった。木が少くなれば小鳥もいなくなるだろう、あの緑の葉っぱ一枚に匹敵することが私達にできるのだろうか。各地から研修にみえるみどり会の合宿の折に、二百人余りの先生方の中で、その疑問を投げかけた。その時の講師のお一人であった周郷先生を、それから三年経って母の会にご講演をご依頼した時に（その間、親しくお話したこともなかったのに）先生は、その日のことを覚えていて下さった。第一声に、「幼稚園を建てるよりは、春になったられんげ草が咲くたんぼをそのままにしておく方が、子どもの教育にはいいんじゃないか、これがね、僕の心に残っているの、それがね、蕪木さんの考えです。日本中幼稚園をつくっちまったら、子どもがよくなりますか、それよりも健康な生きてる自然を残しておく方がはるかにいいです。それでは幼稚園をやめたら――、なんてあんまり強く言わないの、そう右から左に言うのは人を責めているってことなの、そういう心があるかどうかですよ。心の中にそういうことを思っていれば、この幼稚園は普通の幼稚園とちょっと違ってくるわけです。」

こんなちっぽけな私の発言を、忘れずに持っていて下さり、有難く、勿体なく、只管、かたじけなく思うばかりだった。

「人生でもそうでしょうけれども、生きるということはただ生きればいいというものじゃないんですね、人間においては生きるということは惰性になりますからね。やはり生きるということは否定する気持があるから、生というものが味わい深い意味のあるものになる

んですね。」

知能の未分化なもの程、感覚にたよることが多く、幼い者程、鋭いものだ。更に小動物に至っては、いち早く人間に感じないことも（例えば地震なども）予知することができると言われている。私というみみずも、土の中で確かにとらえた本物の臭いだったのだ。そして月日が経つにつれて、私は私の感覚が間違っていなかったことが最大の喜びとなって、挫折している時でもふっと先生の言葉が浮んでくると、励まされ又生きなおすことができる。この喜びを自分だけで噛みしめているのは堪えられず、私の出会いは遅かったし、是が非でも若いお母様方に聴かせたい一念で、ご無理を願って創立十周年（四十九年）のこの機会にと、ご講演を仰いだ。

十月一日　午後一時

一日五百本つくる焼鳥の串を半分つくっておとうちゃんにまかせかけつけたやきとりやさん／四人の工員につくる昼食をきょうは早くつくり、早くかたづけてきた鉄工所の人／幼な子三人を畳職人のお父さんにあずけて前の席に座っていた人／来月出産予定の人／パートを休んできた人／お父さんに会社の休暇をとってもらい、子ども達をたのんできた人／農家の人／教員の奥さん／八百屋さん／牛乳やさん／食料品やさん……、みんながみんな先生のもとに走ってきたのです。

十月一日　午後三時

ここはどこだろうと思った
窓の外の景色は市が尾に似ている
背の高い芒のしげみ
枯れてしまった柿の大木

休耕と収穫が隣り合っているたんぼ
椎の実をつついているひよ鳥

どこからいらっしゃった
何という先生の
何の講演会だろう

日本の大学教授じゃあないし
日本の幼稚園じゃない
日本のお母さん方でもない

ここはどこだろうと思った
窓の外の景色は幼稚園の隣の原っぱだ
伸びきった草の中に
かくれている赤いボール
折れたアカシヤの木
遠くの建売住宅

でもちがうんだ
人間がちがうんだ
話している人も
聞いている人も
なんだかちがう

吸う空気も
吐く息も
いつもとちがう
脈拍も鼓動も
リズムがちがう
通りぬける秋風も
きょうはちがう

次の日、お母様方から手紙を受け取った。
『平凡な人生の中にもキラリと光る時間がいくつかあるように思えます。
――それによって今までの生き方、考え方

を変化させる、或いは人生を変えさせる、そんな時間が――。周郷先生との出会いが、それであったように思えます。陳腐な知識とか経験にあぐらをかいて干涸びかけていた神経が、俄に水々しい活力を得て一挙に動き出したあの興奮を忘れまい』

『怠惰な眠りを貪っていた感覚が、突然呼び起こされ、吃驚して動き出したという感じでした。静止してしまった知識の残骸の中に、安閑と、しかも残骸物を通してしか子どもを見ていなかった二重の罪悪を犯した自責、もっと早く、十年前に周郷先生に出会っていたらもう少しましな親になれたかしら？　なんて思いました』

『イエス様がマリア様の左の胸に心臓の鼓動を子守唄に抱かれている姿を発見して、感動された先生の優しさが、なんとも嬉しく思われました。生まれてきた子どもを通して、神と触れ合っているなと感ずる心を育てていかねばとおっしゃったことに、私の心はいつもの傷みを覚えます。命あるものの不思議ないとなみ、自然界の不思議なまでとしか言いようのない整然とした秩序を思うとき、なにか厳粛な思いにとらわれ、これはきっとなにか大きな力が作用して宇宙を支配しているような気がするのですが、その力が即、神と結びつかない凡庸さに苛立ちを覚えるのですが――。周郷先生が言われるヨーロッパ人と、日本人との違いも、多くの日本人の心の中に神が宿らないことが原因しているのではないかと思ったりします。お話を伺ってきょうは素直な気持になれました。神を信じたいのです』

卒園生のお母様からも『大好きな木の子どもの椅子に座り、当時を懐しむ間もなく、周郷先生の浮世ばなれのしたお姿や、お話にい

つしかひき込まれてしまいました。その言葉が音声を伴っているいないにかかわらず、言葉はその人の考えを高めて、世界を広げていってくれる、ということでした。私達が無意識に考えたり、話したり、書いたりしている言葉も、幼児にとっては新しい世界への光りであり成長を約束させてくれるものであることを知りました。「照千一隅」という私にとって初めての言葉も、その奥にひそむ計り知れない意味におどろきました。「市が尾幼稚園のお母様方は私の話を良く理解されるでしょう」と、先生はおっしゃいましたが、一か月に一度の母の会での基礎づくりがあればこそ、先生のお話が理解でき、あの感動が味わえたのだと思っております』

職員室の壁に、お願いして書いていただいた色紙の、「照千一隅」の文字がじっと私達を見ている。日に何度、この文字に眼をやることだろう。

「一隅の光りが宇宙全体と響き合ってまわりを照らしている。僕は、もし本当に教育に価値があるものとすれば、一つの幼稚園は照千一隅という姿でなければならないと思う。ここに市が尾幼稚園があるということで、お母さん達や近所の世界、まわりの世界が生まれ変ってくる。人間づくりが生き返ってくる。不潔なものは全部なくなってくる。天を照らす一隅のような幼稚園になって欲しい。きょう僕はね、体の調子が悪いのにね、多少でも話らしい話ができたのはみなさんの顔の表情が良かったからです。みなさんが、話をさせてくれたんです。大変、感謝しています」

拍手のあと、誰一人として席を立とうとしなかった。小さな椅子に体を埋めて、いつまでも目頭を押さえていた。

（市が尾幼稚園）